
PIECE?

紗刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PIECE？

【Nコード】

N6816Y

【作者名】

紗刃

【あらすじ】

狼を狙うマフィアのボスである男と、狼の飼い主である少女に間違えられやすい女、そして自然の理を超えた白い狼。敵である二人と一匹が織りなすどこまでも続く逃亡の旅と、マフィアとの激戦。そして 逃亡の旅の行末は、悲しみか喜びか。

男と女と狼

針葉樹林の森の中、一頭と数十人の駆ける足音が風の音で伝わってくる。

次第に足音は速くなり、銃声が鳴り始めた。一頭は焦りを表情にした。

「おい、観念しろよ狼」

低い男性の声が狼の真上から降ってきた。狼はぱつと顔を上にあげた。

そこには木の幹に寄りかかる男。歳の頃は二十代半ば。黒髪に黒耀の双眸と日本人に近い。男は拳銃を狼に向けて口角を吊り上げて瞳を細めた。

狼はその男に唸り一歩後ずさり、そこで気づいた。既に周りを男の仲間達が囲んでいることを。自分の犯した失態に、狼は表情を歪めれば男は楽しそうに笑った。

「もう逃げられないぞ。お前を仕留めて終いだ」

男がトリガーに指をかけた時、仲間内から悲鳴が上がった。何事だ、と身を乗り出そうとした時には男の体は宙を舞っていた。そして男は背中から地にダイブして、目の前につきつけられたリボルバーの銃口を見つめた。

男に銃口を向けるのは少女に見える女。腰辺りまでの黒髪が揺れ、紅い眸が真剣はそのものであった。

「…てめえ、何モンだ」

「私の所有物に手を出そうとしないで」

女は男が英語で話したのに対して、日本語で答えた。彼は少し目を見開いて日本語で話した。

「あの狼は、てめえのだっていうのか」

ちらと狼を眺めれば狼は女に寄ってきて彼女の行動を眺めている。女は男の胸倉を掴んで腹を蹴りつければ、男の部下たちが一斉に銃を女に向けた。だが下手に動くことは出来ない。何しろ、男は彼女のボスであり殺されては堪らない。

「ロツソから手を引きなさい。そうすれば、銃を下ろす」

「はっ。極上のモノにやっとなりついたらっていうのにそう易々引き下されるかよ…！」

「……あ、そう。じゃあ、サヨナラ」

そういつて女が銃口を向けたのは彼ではなく狼。ではなく、その向こうの茂み。そして一瞬の躊躇もなくトリガーを引いた。

茂みから血飛沫があがり、男の仲間と同じような黒スーツの男たちが現れた。男はそれに大きく目を見開いて叫んだ。

「ヴァイントヴェレ…！」

男の仲間たちは素早くそれに反応して彼らと銃撃戦を始めた。男は一つ舌打ちをすれば、次の瞬間腕を引っ張られて立ちあがらせられた。

男が驚いたように女を凝視すれば、彼女は彼を狼に無理矢理乗せた。狼は少し戸惑いを隠せない表情で、女の方を振り向いて口を開いた。

……マスター

「一度話をつけないと厄介だ。帰ってコイツと話をつける」
「なっ……！」

男が反発しようとした時には、狼は地を蹴りその場から離れていた。その速さに男はバランスを崩して落ちそうになった。だが、女が彼の胸倉を掴んでバランスを保った。だが彼は苦しそうで女の手を払いのけて咳き込めば、女はそれに目を細くして溜息をついた。

「おい、降ろせよ！」

「降りたきゃ降りなよ。このスピードと森の中じゃ、怪我はするだろうけどね」

「…止まればいいだけだろ」

「残念。私は止める用事がないから止まらない」

女の言葉に男は額に青筋を浮かべた。完全になめてかかっている。プライドが高く短気である彼としては、怒りが沸々と沸き上がってきている。彼女はそんな彼を見て小さく笑った。

「私は樫かし。よろしく」

「ああ？」

「あ、ちなみにこの子はロッソ。性別は雄ね」

突然自己紹介を始めた樫に、彼は眉を顰めた。

「お前…ココがアレなのか？」

男は自分のこめかみを人差し指で叩けば、樫はじっと男を見つめた後大袈裟に溜息をついた。

「ごめんね。私のソコはアレじゃない」

「あ、そ」

「追加。自己紹介したのは、名前呼ぶ時困ると思ったから」

「別にてめえで十分だろ」

「回し蹴りかまずぞ、コラ」

男に一睨みきかせて楳はそっとロツソと呼んだ狼の頭を撫でた。男は面倒そうに後ろをちらりと一瞥した。もう自分の部下の姿も敵の姿も見えないくらい遠くにいる。二人と一匹は森の奥深くへと消えて行った。

あれから数十分後、男は古びた小屋の前に立ちつくしていた。楳は男を無視してロツソと共に中へと足を踏み入れた。ぼろぼろになった壁や床は所々穴が開いており、日が当たらない為湿っぽい空間となっていた。楳が歩きたびにみしみしと床が不穏な家鳴りがする。男は少し表情を引きつらせて中へと足を踏み入れた。

「適当に座っていいよ」

「…ここお前ん家？」

「まさか。家はイタリアだよ。ここは最近見つけた絶賛の隠れ家つてわけですよ」

「あー…成程」

生半可な男の返答に楳は笑って壁に掛けてあるバッグを取った。楳の側に控えているロツソは先程から男を睨んでいて警戒心丸出しの状態にいる。男はその辺にあった適当な椅子に腰かけた。

「さてつと…貴方の名前は？」

「はあ？」

「だから、名前。聞いてなかったからね」

バックの中を漁りながら樫は男に訊ねれば、男は呆れたように乾いた笑いを浮かべた。

「敵に名前を教えるか？」

「……あ、そう。なら、ココに置き去りにしていくからいいよ」

「あ？ てめえふざけてんのか？」

「至つて真面目。今から母国に帰らなきゃいけないからね。アンタ達に構っている暇なんてないの」

男はそれに不愉快そうに眉を顰めて腕を組んだ。

「聞いたかつたんだが…お前、日本人か？」

「ん？ あー、半分正解。私イタリア人と日本人のハーフ。にしてもさつきは驚いた。日本語で話しかけて日本語で帰ってくるなんて思つてなかったし。貴方は日本人、じゃないよね？」

「奇遇だな。俺もハーフだ。ちなみにドイツ人と日本人のな」

それに少し興味を持ったのか、樫は漁る手を休めて男の方に顔を向けた。

「成程ね。ハーフ仲間ってわけか。ってか顔つきからして日本人だよね」

「てめえもな」

「あー、やっぱりそう見える？ よく言われるんだよね」

ほんの少し困つたような表情で笑つて見せる樫に、男は何かを感じ

取った。それは自分と似たような境遇に立たされた者の表情。そんな気がしたのだ。

「それで、名前は？」

先程まで笑っていた樫の表情は冷めた表情へと変わっていた。男はそんな彼女を見てこめかみを少し引きつらせ、そして大きな溜息の後に乗った。

「ジオ。ついでに、シュトゥルムファミリーのボスだ」

家へ帰還せよ

ジオの名乗りでに、楪は暫くのまま無言だった。表情は少し驚いた、そんな感じだった。そんな楪を見て、ジオは皮肉気に笑みを浮かべた。

「俺がマフィアのボスって知って、驚いたか？ 今更許しを請われなくても困るがな」

ジオが鼻で笑った時だった。楪はぷつと吹き出して肩をわなわな震わせてやがて大声で笑った。

「あつはははは！ なに？ ボス？ 似合わないー！」

目じりに涙を浮かべて腹を抱えて笑っている楪に、ジオは表情を引きつらせた。そして彼女を睨みながら低い声で言葉を口にした。

「てめえ…自分が危ない状況にあることがわかってんのか？」

「勿論。でも、笑っていい時に笑わないでどうすんの？」

マスター。少し空気を読んで下さい

「あれ？ ロッソまでそんな事言うの？」

心外だ、と言わんばかりに楪はちよつとだけ唇を尖らせた。そんな子供染みた光景に、ジオは肩を落として額に手をやった。

（完全に相手のペースに吞まれてんじゃねえか…。なんとか戻らな
いとな）

「思っていること顔に出てるよ、ジオ」

分かりやすい方でとても助かりますよ

「おっ前らな…」

びきびきと額に青筋が入るジオを見て、楪は仕方なさそうに息をついた。そして整頓が終わったバッグを肩に下げて武器を装備し立ち上がった。ジオはそれに目を細めて一度楪とロッソを交互に見やっただあと口を開いた。

「どこに行く？」

「え？ だから、家に帰るんだってば。此処にいたってロッソが狙われてるし家に帰った方が安全でしょう？」

「一理あるが…俺を目の前にしてそれをいうか？」

「だから、アンタと話をつけるんだよ。アンタも一緒に来て貰う」

「…冗談だろ」

「はい、行きますよー」

どこまでも自分のペースな楪に、ジオは頭を抱えるばかりだ。そんなジオを見て楪は「だからよろしくって言ったでしょ」と軽快に笑って見せた。ジオは仕方なさそうに立ち上がって、楪の後ろをついて行く。

小屋の後ろにはアメ車があった。ビュイック　ロードマスターであった。小屋と釣り合わないそれに、ジオは啞然として何度か瞬きをして凝視した。それに楪はけらけらと笑ってキーをジオに手渡した。

「…は？」

「運転出来るでしょ？　マフィアのボスさん」

そういつてドアを開けて助手席へと乗り込む楪と後部座席へと入るロッソ。ジオは怒りを通り越して呆れ返ってしまっていた。そして諦めたように運転席へと乗り込んでキーを差し込み、エンジンをか

けた。ドウルンという音が鳴り、車は起動する。

ジオが隣の楪をちらりと眺めやれば喜々とした表情をしていた。こ
うして見れば、子供と変わりないなと思った。

「じゃ、イタリアに向かってレッツゴー！」

「そんなノリ気なのが羨ましいぜ… ったく」

「あれ？ ダメだった？」

「…俺と乗り合わせた事、後悔すんなよ」

その言葉に一瞬目を丸くした楪だが、にっと口元に笑みを浮かべた。
それを見てジオは不敵な笑みを浮かべてアクセルを思いきり踏んだ。
ぐん、と重圧がかかって楪の身体はシートに思いきり埋もれた。後
部座席に座るロツソはその荒々しい運転に、バックミラー越しにジ
オを睨みつけた。

「おい、お前の狼オレの事睨みつけてんだけど」

「そりゃ、運転が荒々しかったからね。てか、狼じゃなくてロツソ」

マスター。マスターの命に背くように申し訳ありませんが、俺は
そいつに名前を呼ばれたくはありません

ロツソはジオを睨みつけたまま楪に向かっていった。あまり申し訳
なさそうには聞こえない。だが楪は目をぱちくりさせて柔らかく笑
んだ。

「そっか。なら仕方ないよね」

申し訳ありません、マスター

「うっん、いいの。無理に押しつけたのが悪いんだからさ」

楪はロツソに笑って見せれば、ロツソは少し表情を柔らかいものに
した。とはいっても動物の表情のどこが変わったかなど分かるもの

ではないのだが。そんな二人のやりとりを聞いていたジオはぽつりと呟いた。

「狼つつーより、忠犬だな」

「おい、お前。ロツソのこと馬鹿にしただろ」

「へいへい。つつーか、お前は少し大人しくしてる。運転に集中できない」

ジオがそういうと、樫は大人しくシートに凭れかかった。ロツソはそれを半眼で見た後、静かに目を伏せて眠りについた。急に大人しくなってしまう樫にジオは片眉を吊り上げた。

「大人しくなんのが早いな」

「なに？ 子供みたいに騒いで欲しかったの？ 生憎、私は今年で22歳になんのよ」

「…冗談きついで」

「大マジだつてば」

笑えない、というように表情を引きつらせたジオに、樫は心外だと言わんばかりにむっとした表情になる。

彼女は幼い顔立ちである為、まだ10代に見られてもおかしくはない。それが彼女のコンプレックスでもあるのだが。

「餓鬼と乗り合わせたとばかり思っていたんだがな」

「ふーん…餓鬼の方が良かった？ アンタ、ロリコン？」

「ふざけんなよ、誰がロリコンだ」

ジオは額に消したはずの青筋をまた浮かべて、口端を引きつらせれば樫は「冗談」と肩をすくめて笑った。どこか楽しそうにも見える樫をじっと眺めるジオに、樫はデコピンをかました。

「いてっ…何すんだよ」

「前見てちゃんと運転してよ」

楳の言う事は最もである。ジオは生返事をして運転に集中する。楳は新緑の香りのする風を受けながら景色へと目を移した。

荒れる帰路

なんだか車の中で険しい表情になっているのは、後ろから2台の黒い車が追いかけて来ているからだ。それに乗っているのは、皆黒スーツの男たち。思い浮かぶ点は一ツしかないのだが。ハンドルを左右にきり相手の銃撃を交わしているジオは、口に銜えた煙草の灰が今にも落ちそうになっていた。そんな彼の隣で楯は顔を青くし口元を押さえている。

「おええ…気持ち悪い」

「仕方ねえだろっ！ 逃げんのに必死なんだから」

「…吐きそう」

「我慢しろ」

楯に容赦ない一言を放ってジオは煙草を車の外へと捨てた。「ポイ捨て禁止…」などというか細い声が隣から聞こえたがまったくもって気にする様子はない。

その様子を見かねたロツソは、大袈裟に溜息をついて瞳を閉じた。すると、ロツソの足元から白煙がたちあがり、車内は煙に覆われる。ジオは一つ舌打ちをして前が見えない状況でハンドルをとる。

「てめ、狼何してんだ！」

白煙が消えて怒りを爆発させたジオが、バックミラー越しに狼を睨みつけた。ハズだった。そこにいたのは、白い狼ではなく白髪の少年。いや、どちらかといえば青年寄りだろう。ジオは啞然として口を開いたまま彼を見た。彼はミラー越しにジオを睨みつけたあと、助手席のシートに手をおいて楯の顔を覗きこむ。

「マスター、大丈夫ですか？」

「…む、無理」

「では、銃をお貸し頂きたい」

「どつぞ…」

樫は銃をホルスターから銃を外して彼に手渡す。彼は窓を開けて後ろの車と銃撃戦を始めた。ジオはやっと我に返れば樫に向かって怒鳴る。

「おい、どうなってんだよ！ 狼はどこ行っただんだ！？」

「煩い…騒がないで…気持ち悪」

「人の質問に答える！！」

「…うー…だから、後ろにいんのがロツソだつてば」

耳を塞ぎながら樫は必死に嘔吐と攻防戦を繰り返している。ジオは片手でハンドルを切りながらシートベルトを外した。

「おいおい…狼が人になるなんて聞いたことねえぞ」

「だから、ロツソは特殊なんだよ…」

「特殊すぎんだろ」と呟いたジオを、樫は顔を真っ青にしながら睨みつけた。

「そんな特殊な狼狙ったのは、アンタでしょ…おえ」

「んなことまで知らねえよ！ ってか、吐くなら窓開ける！」

「えー…知らないの？ 窓開けて吐いたら、吐いた物が自分に返ってくるんだよ。そうじゃなかったって、今顔出したら打たれる」

樫は苦しそうな呻き声を開けて自身の口を押さえた手じゃない方の手を、喉元に当てる。ジオは呆れてものも言えなくなっている。

ガラスに蜘蛛の巣状の亀裂が入る。

ロツソはそれに一つ舌打ちして、後ろに積んだ黒い鍵のかかった箱から簡易軍用ライフルを取り出した。ジオは啞然としてスコープを覗いているロツソを見た。

「おつまえ…そんなの、どこから仕入れたんだよ」

「あの小屋に置いてあったのをかつぱらってきただけだ」

「ちなみに、5つ全部弾と一緒に拝借してきた、んだよ…」

もうそろそろ限界の近い楨は、深呼吸を繰り返しながら喉に当てた手を上に持ってきて瞳を覆った。それを仕方なさそうに横目で見たジオは、車体を90度旋回させて止めた。

そして後部座席のライフルに手を伸ばし2つを手にとると、車から降りて当てずっぽうにトリガーを引く。それが良かったのか悪かったのか、相手の車2台をパンクさせた。

急ブレーキをかける車にロツソとジオは容赦なく弾を撃ち込む。そんな二人の活躍を見るわけでもなく、楨はシートに低く身を沈めた。

「そんな無茶苦茶なやり方では、弾を無駄にするだけだ」

「てめえ、俺の今の活躍を見てなかったのか？ 見事に2台ともパンクさせただろうが」

「まぐれだ、まぐれ。取りあえず、確実に四肢をやれ」

「てめえに指図される覚えはないぜ、狼さんよ」

二人 正式には一人と一匹だが は数秒睨み合った後、断末魔の銃撃戦へとその場を変えた。そんな二人に、楨はポツリと呟いた。

「なんでもいいからさ…はやく、帰ろうよ」

嘔吐とホームシックの二つで楨の状態は悪化していた。そんな楨の

気持ちなど知らずに、断末魔。絶叫に怒鳴り声が響いた。

彼女の過去

あれから小一時間ほど経った頃。やっと銃撃戦に終わりがきた。ジ
オとロツソは、怪我はしていないものの、服が汚れていて少し汗だ
くである。

そんな二人をよそに、助手席で規則正しい寝息をたてているのは樫
そんな樫を見て、ジオは疲れ切った顔を引き攣らせ、ロツソは安堵
したように薄い笑みを浮かべる。運転席に乗り込んだジオは樫を一
瞥した後、その頭を思いつきりぶつ叩いた。

「つつー…」

「お目覚めか、眠り姫」

「あー…終わったんだ。お疲れー」

「つつく…てめえは良い御身分だよな。ぐっすり寝てやがって」

不快そうに眉間に皺を刻むジオを後部座席のロツソはじとりと睨み
続ける。樫は眠たげに半眼されている目をこする。

「一時間もかかってしまいました。お待たせして申し訳ありません」

にこりと笑みを浮かべたロツソは、樫に向かって彼女の銃を差し出
した。樫は「お疲れ様」と微笑めば満足そうな笑みを向けて銃を受
け取る。そんな二人のやりとりを見てうんざりという表情のジオは
エンジンをかけて車を発車させた。

「それで、後ろの狼のことだが…どうなっている？」

「何が？ 内部構造？ そこまでは分かんないよ」

「誰がそこまで言えつつつた？」

ジオは少々引き攣った笑みを見せれば、樫は「じょーだん、じょーだん」と手をひらひらと振って見せた。そして目つきを真剣なものへと変える。

「知ってて追いかけていたんじゃないの？」

「いや、そこまでは知らなかった。俺らがそいつを狙っていたのは、その見てくれだけでだ」

「見てくれだけ？　じゃ、アンタらと戦っていた奴らは？」

「そこまでは、俺も知らねえな」

「そう」と小さな呟きを残して、樫は眠そうに大きな欠伸を零した。そして少し目を伏せて手にする銃を眺めた。

「ロツソはね、私が拾ったんだ」

「…拾った？」

突然語り始めた樫にジオが問い返せば、樫はただ頷いた。ロツソはただ黙ってそれを聞いているだけだ。そして話を続ける。

「確か、十歳の頃だったと思うなあ…。うちの屋敷にね、ロツソが迷い込んだの。それでロツソは普通と違って白い毛並みだったから、そりゃもう大騒ぎでね」

「だろうな」

「屋敷中を部下達が取り囲んでさ、ロツソに向かって銃を向けたみたいなんだよね。私は自分の部屋に籠っていたから分からなかったんだけど、銃声が聞こえたからおかしいなとは思ったんだよね。だって、そう易々マフィアの家になんて入って来ないでしょ？」

「ああ、そうだな。……あ？　お前、マフィアなのか!？」

余所見運転と言わんばかりにジオは樫の方を見た。樫はきよとんと

して目を丸くさせた。

「あれ？ 言ってなかったっけ？ まあ、そういうこと。ってか、前見る前」

「あ、…ああ。それで、どうなったんだ」

それでね、と樫は話を続けた。

ロツソはその銃撃の中をかいくぐり、屋敷に侵入してしまったのだ。そして今度はロツソを見た使用人たちの悲鳴と銃声が鳴り響いたのだという。それが樫の部屋の近くまで聞こえて来て、彼女は部屋の隅に膝を抱えて蹲ってしまった。すると、彼女の部屋の扉が破壊されて、一匹の白い狼が入ってきたのだ。

それが、彼女とロツソの出会いだった。樫はロツソを見た時、驚きはしたが一切怯えなかった。それどころか、ロツソに近づいて触れたのだ。

「きつとね、この瞳の色と同じ子に会えたことが嬉しかったんだよ」
樫の瞳の色はガーネットのように真っ赤な瞳だ。そしてロツソもまた、同じ色の瞳をしていた。

「この目の色で、気味の悪い子、って言われてさ。それ以来、部屋に閉じこもるようになったっちゃんね。そんな時にロツソが舞い込んできたんだよね」

「まあ、駆け付けた使用人が顔を真っ青にしてぶっ倒れちゃったんだけど」と言って樫は思い出して苦笑を零した。その使用人が倒れて数分も経たないうちに部下と使用人たちが集まってきて、ロツソ

を撃とうとしたのだ。だが、樫がそれを阻んだ。彼女はロツソの前に立って、ロツソを撃たせないようにしたのだ。そして、こう言い放った。

『この子はわたしのぶかに、ともだちになるの!』

人外の友達とは言え、狼は無理があり過ぎるだろう。と考えた部下達によって樫とロツソは引き離されそうになった。だが、そこに到着した樫の父親がそれを見て笑ったのだ。

「私が必死にロツソにしがみついでいてね。それを見た父さんが、「いいじゃないか。好きにさせてやれ」って言ったんだよ。まあ、部下達もすぐには引き下がらなかったんだけどさ、ロツソが私に手を出さないからって渋々引き下がったんだよ」

「……壮絶な過去だな」

「でしょ？ ロツソとは長い付き合いなの。だから、金になるとかの理由でロツソに手を出そうとする奴らは許せないんだよ」

樫の瞳が剣呑に細められた。ジオはそれに一瞬表情を強張らせた。

(…マフィアが金の話に食いつかねえか。…変わった奴だな)

ジオとて、金は何より必要になる資源であった。金がなければ武器も調達できないし部下も養ってはいけない。その金沙汰を嫌う樫は、マフィアの中にいない方が似合っていた。

「…ま、それはそれで面白いんだけどな」

「は？ 何が？」

「こつちの話だ。さて、追手が来ない内にお前んちに行くぞ」

「手荒な運転は二度としないですよ」

「あっさり」「はい、そうします」「とは言えないな」

そう口にしたジオの頭をロツソが思いきり叩けば、車内で喧嘩が勃発した。呆れるような表情の樫はそれに止めに入るわけでもなく、ただ笑っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6816y/>

PIECE?

2011年11月20日19時14分発行